

座右の銘は
「なせば成る、何事も」
鍼灸の道の極みを追求



有田はり治療院

院長 有田重紀さん

鷹尾三丁目にある「有田はり治療院」は、来年で開院60年目を迎えます。同院で、多くの利用者の治療に当たり、現在も第一線で活躍するのが、全盲の鍼灸師、有田重紀さん（83歳）です。

山田町山田出身の有田さんは、昭和12年に農業を営む両親の8番目の子として誕生。生後間もなく先天性の目の病気を発症しますが、家族や先生らのサポートにより、山田小学校に入学。当時のことを、「学校までの道のりの景色や教科書の色使いなど、今も鮮明に覚えている」と語る有田さん。

Smiling faces of miyakonojo



しかし、10歳ごろから徐々に目の病気は悪化。昭和23年、宮崎県立盲学校（現…県立明星視覚支援学校）に編入しました。同校の高等部に進学後は、授業の一環として、はり治療を学びました。その奥深さに興味を持ち、高度な技術を習得したいと思うようになった有田さんは、東京の鍼科学研究所に進学。日本で初めてリンパ鍼療法を開発した平方龍男さんを師として3年余り、リンパ系統に対するはり治療を中心に、痛く

ない「鍼」を学びました。在学中、有田さんは、技術習得が思うように進まず、希望を失いかけたときもありました。しかし、真摯（しんし）にはり治療の勉強に向き合い、「テープ録音の技術を学んだり、多くの本を読んだりすることで、心を晴らし、粘り強く学ぶことができた」と振り返ります。

鍼灸師として技術を身に付け、帰郷した有田さんは昭和35年、実家近くで「有田はり治療院」を開院しました。その後、現在の場所に治療院を移転。当初、全てが順風満帆とはいきませんでしたが、腕の良い鍼灸師になれば必ず利用者さんは来てくれると信じ、鍼灸技術の向上を決意。生理学や病理学などの西洋医学についても学ぶ一方、中国派遣に参加し、本場の鍼治療を体験しました。また、アマチュア無線の資格を習得したり、パソコンを利用し、多くの書籍を読んだりして、さまざまな知識を高めました。

最近では、インターネットを使用して、同業者だけでなく、多くの人々と交流が続けています。「交流で世界が広がる」と話す有田さんは、多くの人が交流を広げるきっかけになればとの思いで、さまざまな福祉事業にも貢献してきました。昭和42

年には、市の広報紙を音読した録音テープを、必要とする人に配布できないか市に提案し、「声の広報」が実現。併せて都城市点字図書館（総合社会福祉センター内）の立ち上げにも関わりました。その功績が認められ令和2年2月に「第69回障害者自立更生等厚生労働大臣表彰」を受章。有田さんは「そばで支え続けてくれた妻（ツギさん83歳）のおかげ。受章できてうれしい」と笑顔を見せます。

「なせば成る、何事も」を座右の銘とする有田さんは、「はり治療の普及に力を入れたら、さらに喜ばれる治療を目指していきたい」と、夢を膨らませていました。



厚生労働大臣表彰伝達式での有田さん（中央）と都城市視覚障害者福祉会の八木会長（左）